

1

子どもは手ごわい



これは、子どもと子どもを愛する人々についての本です。私が南カリフォルニア医大の小児科の教授だった一九七〇年代初めに書いたものですが、私自身の子どもたちがまだ幼かったので、子育てについて助言をするのは勇気のいることでした。それでも私は、学者としても、また臨床の経験からも、子どもがどのように育てられるべきか、親の何を必要としているかについて、確固たる信念を持っていました。

「思い切ってしつこくしましょう」は、初版以来今日まで、二百万部以上も読まれてきました。この年月の間に、私の視野は広がり、そしておそらくは、洞察力も鋭くなつたと思います。何千という家族に関わり、子育てに関して、大勢の権威や同僚の見解を学びました。私の子どもたちは、思春期を通り抜け、今では自分たちの家庭を築いています。この期間に、子育てや子どもの成長に関する私の見解が、大きく変わっただろうと思われる方もあるでしょう。でも違います。確かに、社会背景は初版の頃とは劇的に変わりました。しかし、子どもというものは変わりません。これからも決して変わらないでしょう。私は、良き子育ての原則は、神が世界を創られたときから変わらぬ永遠のものであると、今やますます確信しています。聖書に示された考え方は、世代から世代へと受け継がれてきて、私たちの祖先にとつて有効であったのと全く同じように、二十一世紀にも有効なのです。不幸なことに、近ご

るの親たちの多くは、これらの由緒ある教えを聞いたこともなく、子育てについて、何の手がかりも持っていないのです。

私は、ある困り果てた母親を忘れられません。悩みの種は、三歳の反抗的な娘サンデーで、サンデーは、意志の強さで母親を完全に負かしてしまっていました。相談に来た前日の午後、いかにもサンデーらしい事件がありました。母親（ニコルス夫人と呼びましょう）は、サンデーにお昼寝をさせるつもりでしたが、おとなしく寝そうにないことはわかっていました。サンデーは、自分のしたくないこととはしない子どもでしたから。でもこの時のサンデーは、やりたいようにやること以上に、母親を苦しめることに興味がありました。そこでサンデーは叫び声をあげ始めました。近所中をうるたえさせるような大声でわめき、母親を困らせたのです。それから涙声で、お水を持ってきてとか、いろいろなことを要求しました。

ニコルス夫人は、最初はそうした要求を拒みましたが、サンデーのわめき声が再びピークに達すると、降参してしまいました。水を持って行くと、だだっ子はそれを押し退け、ママがさっさと持ってきてくれなかったからいらぬと言いました。ニコルス夫人は、コップを持ってしばらく待っていました。それから、もし五つ数えるうちに飲まないなら、台所に戻しに行くと言いました。

サンディーは、意を決して数えるのを待ちました。「みつつ…よつつ…いつつ！」そしてニコルス夫人がコップをつかんで台所へ向かうとまた泣きわめき、こうして、困っているママをヨーヨーのように行ったり来たりさせるゲームを、飽きるまで続けたのでした。

実は、ニコルス夫人も小さな娘も、いいかげんで役に立たない育児法の大勢の犠牲者のひとりなのです。長い間、育児書などではこういう育児法が主流でした。この母親が読んだ本にも、子どもというものは冷静に忍耐強く接していればいつかはわかってくれるものだから、厳しいしつけなど必要ないと書かれていました。また、子どもの反抗には敵意を発散させる効果があるので、奨励するようにということでした。母親は、専門家が勧めるとおりに、子どもと対決しているときには、子どもの気持ちを言葉で表現してやろうとしました。「お水を飲みたかったのに、ママが持つて来るのが遅すぎたから怒ってるのよね。」「お水を台所に戻しに行っちゃいよよね。」「お昼寝をさせようとすると、ママがきらいなのね。」さらに彼女は、親子の対決は、誤解や見解の相違にすぎないのだと教えられていました。

残念ながら、ニコルス夫人も助言者たちも、間違っています。彼女と子どもとは、単なる見解の相違を経験していたわけではありません。母親は娘から戦いを挑まれ、

からかわれ、反抗されていたのです。このような正面对決は、心のこもった対話では解決しません。なぜなら本当の問題は、お水とかお昼寝とか、そういうひとつひとつの物事とは、まったく関係がないからです。この対決の、そして他の何百もの対決の本当の意味は、ただ次のことなのです。つまり、サンデーは、厚かましくも母親の権威を拒絶していたのです。こういう時に母親がどう対応するかで、将来のふたりの関係が決まるのです。特に、思春期の間の関係が。

もちろん、過酷で抑圧的で愛情のないしつけが危険だという警告は大切です、耳を傾けるべきです。しかし、そのような抑圧的なしつけの害ばかりが繰り返し語られて、親が指導権を放棄して何のしつけもしないことを正当化してきました。愚かなことです。強情な子どもが、小さなこぶしを握りしめて、親に向かって挑戦に応じると挑むときがあります。子どもは、よく言われているような欲求不満や内なる敵意に動かされているわけではありません。子どもはただ、どこに境界線があつて、だれがそれに従わせることができるのかを、知りたいだけなのです。

愛情としつけ

親は、子どもがしていいことと悪いことの境界線をどう定め、従わないときにはどうすればいいかを知る必要があります。ただし、こうしたしつけの行為は、愛情と思いやりをもつて行わなければなりません。これは、しつけと愛情とが相いれないと考える親にとつては、理解しにくいことでしょう。健康で、尊敬の心を持つた、幸せな子どもを育てるためには、愛情としつけのバランスはなくてはならないものなのです。

また、「しつけ（訳註：discipline には『訓練する』という意味もある）」ということばは、子どもが言うことをきかない時だけに使うものではありません。子どもたちに、自己訓練と責任ある行動を教えるのもしつけです。人生の義務と責任とをどうやって果たすかを学び、自制という技術を身につける手助けをするのです。学校の課題や、グループの仲間の要求や、後にはおとなとしての責任を果たすために必要な、人格的な強さを身につけさせるのです。

こうした性質は教えることなどできないと、信じている人々がいます。こういう自由放任主義の人たちは、親にできるのは、せいぜい子どもたちにできるだけ楽な

道を歩ませ、障害物をどけてやることだと言うのです。

私はこのような考えを否定しますし、また否定するのに十分な証拠を集めました。子どもは、混じりけのない愛情に包まれて、意味のある一貫したしつけに支えられている時に、最も良く育つのです。現代のように、暴力、野蛮な行為、不道徳、性感染症、薬物乱用が蔓延する世の中で、子供たちに健全に育ってほしいなら、希望や運に頼ってはいけません。自由放任主義は、子育ての手引きとして失敗だったというだけではすみません。その手引きを使ってみた人々にとって、とんだ災難でした。

けれども愛情を伴うしつけには効き目があります。しつけは、親子が互いを尊敬する気持ちから生まれる愛と思いやりを起こさせます。これがなかったら、互いに愛し信頼すべき家族がバラバラになってしまうところですが、そこに橋をかけるものなのです。そして子どもたちも、他の人々を尊敬することを覚え、責任感のある建設的な市民として生きるようになるのです。

当然ながら、この特効薬には値札がついています。つまり、代価として、勇気、一貫性、信念、勤勉さ、熱心な努力が要求されるのです。ひとこと言えば、親は子どもを混じりけのない愛情をもって、思い切ってしつけなければならぬのです。

極端なしつけ 1 厳しすぎる親

過去七十年にわたって、しつけについて、熱い議論がみられました。心理学者や小児科医や大学教授やらが登場して、正しい子育てについて親たちに語ったのですが、残念ながら、これらの「専門家」たちは、お互いに全く意見がくい違っていて、親たちの助けになるどころか、争いの種をまいてきたのです。

おそらくそのおかげで、二十世紀には、厳しい抑圧的な支配から、行き当たりばつたりの自由放任主義へと、極端から極端へと振り子のように揺れ動いてきたのでしょう。どちらの極端も、幼い犠牲者の人生に特徴的な傷を残すことを、今の私たちは気づいています。けれどもどちらの傷がより深いかは、きわめて難しいところです。

極端に抑圧的な場合には、子どもは親に完全に支配されます。冷たい厳格な雰囲気の中で、いつもおびえて暮らしています。自分で決断することができず、親の権威という靴で人格を踏みつぶされています。依存心がいつまでも残り、胸の奥深くに怒りを抱え続け、精神病さえ、生じることがあるのです。

もっと心配なのは、肉体的、精神的な虐待を受けている子どもたちのことです。長年の間に私はひどいケースをたくさん扱ってきました。あるひどい父親は、幼い

息子がおねしよをするたびに、息子の小さな頭をシーツにくるんで逆さまにして便器に押し込んでいたのです。錯乱した母親が、子どもの両目をカミソリの刃でえぐり取ってしまったケースもありました。その気の毒な少女は、母親が自分の視力を奪ったことを知りつつ、一生盲目で生きるのです。また、法律を犯さなくても、こまやかな愛情という、子どもたちに欠かせない必要を無視することで、間接的に虐待することもできるのです。不当な、不公平な罰によっても可能です。「体罰」といえば済んでしまう親の行為、例えば日常的にぶつ、たたく、ける、あるいは子どもを地面にたたきつけるようなことです。

それから、父母による屈辱的な行為はみな、子どもに、自分は愚かで変わり者で愛されていないと感じさせるのです。冷淡で厳しい親は、子どもの心に一生治らない傷をつけてしまうことがよくあります。この点で、本書はとても誤解されやすいのですが、私は第二章で特定の状況と制限を設けた中での、公正な体罰の使用を奨励しています。どうか誤解なさいませぬように。私は、親は厳格であるべきだとは信じていません。本当です。子どもは、家庭で責められたり、批判されたり、ばかにされたり、拒絶されることに、信じられないほど傷つきやすいのです。そもそも子どもたちには、安全で暖かい環境で、受け入れられて育つ権利があるのです。

けれども、もう一方の極端も子どもに有害です。おとなの指導がないと、子どもは赤ちゃんの時から自分のしたいようにします。世界は自分を中心に回っていると、思い、身近な人間を徹底的に見下し軽べつします。家の中はめちやくちやで、小さなかんしゃく持ちをどこかに連れていくのが恥ずかしいので母親は家庭に縛りつけられてしまいます。もしこういう状況が、健全な安定した子どもをつくり出すならこの苦勞にも耐える価値があるでしょう。しかし、決してそうはなりません。

しつけの問題に関して近年意見を述べてきた著者の多くが、親たちを混乱させ、家庭をリードしていく力を奪ってしまいました。そういう著者たちは、ほとんどの子どもには、自分のやりたいようにやって、親子の間に必ず起きる意志の戦いで勝ちたいという願望があることを、見落としているのです。

一例として、放任主義の盛んだった五十年代に出版された子育ての本を見てみましょう。「二歳から五歳の子ども」というタイトルで、ルーサー・ウッドワート博士のアドバイスを次のように紹介しています。

もしお宅の小学校入学前の子どもが、あなたのことを「バカ」と呼んだり、「おまえなんかトイレに流してやる」とすぐんだりしたら、どうしますか。しかる、罰する、あるいは賢明にも、冷静に切り抜けますか。このような言葉の暴力を子どもが卒業するのを助けるために、最善で効き目の速い方法としてウッドワート博士がお勧めするのは、理解しようとする肯定的な姿勢です。両親が、幼児というものは、時には怒りを覚え破壊的になるものだ、十分に理解しているなら、こうした爆発を最小限にすることができるとしよう。子どもがいったん敵意から抜け出せば、破壊したい欲求は消え、愛と好意という本能的な感情が芽吹いて育つ機会となるのです。子どもが六歳か七歳になれば、親に生意気な口をきくの卒業してほしいと、きちんと教えることができます。(註1)

ウッドワート博士の勧めは、二十世紀中ごろに流行した育児法の典型的なものです。親たちに対し、子どもに権威を敬うことを簡単に教えられる幼児期に、何もせずに過ごすように勧めているのです。私は拙著「意志の強い子」の中で、次のように反論しています。

ウッドワート博士の提案は、子どもにかんしゃくを起こすことをおとなが許し奨励してやれば、子どもはやさしく愛情深い人間に育つという極端な考えに基づいています。楽観主義の博士によれば、六、七年間母親を「バカ」と呼んだ幼児が、突然彼女に対して愛情と尊敬を抱くようになるだろうということです。そんな結果には、とてもなりそうにありません。博士の独創的な「理解しようという姿勢」（その意味は、何もせずにいるということですが）は、多くの場合、思春期の反抗につながるでしょう。（註2）

私は、自分の子どもが親切で感謝の心を持った感じの良い人に育ってほしいなら、そういう性質を、教えなければないと信じています。希望しているだけではだめです。もし子どもたちに正直さや誠実さや公正さを身につけてほしいなら、意識的に、そのように成長するよう働きかけるべきです。ポイントははつきりしています。持つて生まれたものだけでは、望ましい態度を身につけさせることはできません。子どもというのは、教えられたことを学ぶものです。親たちが子どもの幼い時期にやるべきことをやらずにいて、魔法のように子どもの態度が改まることを期待することはできません。

もし、どちらの極端も危険だとしたら、中間の安全地帯はどうすれば見つけられるでしょうか。家庭での日々の関係を導いてくれるような、論理的でまともな子育ての原理が、確かにあるはずですが。社会学者たちは、役に立つ方法を見つけ出せないものでしょうか。おそらくこれは、行動科学と医学の研究に十年の歳月を費やした人間の発言としては、異端的に聞こえるかもしれませんが、私は、上手な子育ての方法に関する情報源としては、科学の世界を一番に信用してはいけません。もちろん、価値のある研究も、いくらかは行われてきました。しかし、親と子の相互関係というテーマは、信じがたいほど複雑で微妙な問題なのです。それを科学的に調査する唯一の方法は、親子関係を単純な共通項に分解して、調べられるようになることです。しかしそうすると、全体的な雰囲気は失われます。人生には、あまりにも複雑すぎて、ほとんど厳密な調査を受け入れられない事柄があり、私の見解では、親のしつけというのも、その一つなのです。

昔ながらの子育ての知恵

親たちを導く最良の情報源は、キリスト教倫理の知恵の中に見出せるでしょう。それは、創造主に由来するもので、キリストの時代から、世代から世代へと受け継がれてきたものです。私の母が、母の母が、そのまた母がほとんど本能的に理解していたものです。西洋文化の中には、子どもと子どもが必要についての共通した知識があったのです。だれもがそれを用いるわけではなくても、ほとんどの人はその見解に賛成でした。百年前なら、赤ちゃんが生まれたら、経験を積んだ年上の女性たちが訪れて、新米おかあさんに、赤ちゃんの世話について教えてくれたものでした。そして次の世代も、やがて近所の新米さんのために、同じような奉仕をしたのでした。

そうしたシステムは、一九二〇年代まではとてもうまくいっていました。しかしだんだんと、文化はその伝統に自信を失い始め、専門家に忠実に従うようになっていきました。行動学者のJ・B・ワトソンは、最初のそして最も影響力のある指導者の一人として登場しましたが、子育てに、本人いわく、「絶対確実な」方法を提案し、母親たちは、そのやり方を丸ごと受け入れたのです。母親たちが彼の助言に従いさえすれば、どんな子どもでも思いどおりに作り上げることができると言いま

した。「医者、弁護士、芸術家、商人、そして、犯罪者にでも。」と。

ワトソンは親たちに、最高の結果を望むなら、子どもたちに何の愛情も示さないように助言して、次のように書いています。

絶対に子どもを抱きしめたり、キスしたり、ひざに乗せたりしてはいけません。どうしても必要なら、おやすみなさいを言う時に、額に軽くキスしなさい、朝のあいさつは握手にしなさい…。

子どもをかわいがりたくなったら、母親の愛情は、危険な道具であることを思い出しなさい。決して癒されない傷を負わせるかもしれない道具なのです。その傷が、息子や娘の幼児期を不幸にし、思春期を悪夢に大人としての職業上の成功や結婚生活の幸福を台無しにしてしまうかもしれないのです。(註3)

ワトソン博士のこの助言は、今日では全くばかげたものに思われます。一九二八年当時でさえ、そんな助言を信用する人がいたとは信じがたいのですが、ワトソンは当時大変人気があり、実際に彼の著書は何百万部も売れたのです。親たちは、こんな生焼けの肉みたいに食えない本が勧めるやり方で、子どもを「整え」ようと一

生懸命やったのでした。

新しい、変わった助言が出るたびに、私は不思議に思いました。もしこの人たちの子育ての新しいやり方がそんなにすばらしいものなら、なぜ今まで見当たらなかったのだろう。五千年以上にわたって、二百億人以上の親たちが、どうしてその考え方を見落としてきたのだろうか。逆に、そうしたすべての母親や父親の、積み重ねられた経験こそ、重要なものと受け止めるべきです。

この本を書いた私の第一の目的は、私の理解するキリスト教の子育ての概念を、後の世代のために書き残すことでした。この子育ての考え方は、何世紀にもわたって何百万もの父親や母親を導いてきたのです。これはあなたの家庭においてもうまくいくと確信しています。